

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

語り継ぐこと、記憶を保存すること
(震災を語り継ぐ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹沢, 尚一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008418

語り継ぐこと、記憶を保存すること

たけざわ しょういちろう

竹沢尚一郎

すべてが破壊されたまちで

東日本大震災が、どれほど多くの尊い人命を奪い、家屋や施設を破壊したか。被害の大きさをここでくり返す必要はあるまい。私がここでとりあげたいのは、被災したひとりひとりの心のなかにあるさまざまな経験であり記憶である。

しかし、それらについて触れようと思えば、客観的な観察者であることはできない。そうした経験を共に追体験しようという気持ちのない人間に対して、彼らが心を開いてくれることはないからだ。

であれば、私がどのようにして被災地に行くことにな

ったのか。そして、どのようにして現地の人びとと接していったのか。それから語り始めることが必要だろう。

震災と津波がもたらした被害の映像を見たときから、私たち親子三人はその衝撃に打ちのめされて、何にも手のつかない日々がつづいていた。地震から二週間経過しても被災地の復旧が少しも進んでいないことを知ったとき、私たちは話し合って被災地の支援に行くことを決めた。研究というより、ボランティアとして現地の人びとの生活の復旧を支援したいと思ったのだ。そう決めたとき、気持ちがフツと軽くなったことを今も鮮明に覚えている。

とはいっても、被災地ではガンリンが入手できないこ

とを知らされていた。四月の上旬になり、ようやくガソリンの入手が現地でも可能になったと知ったとき、私たちは被災地に向けて出発した。どこでも寝られるように車にテントと寝袋、食料などを積んで、京都の自宅を出たのだった。

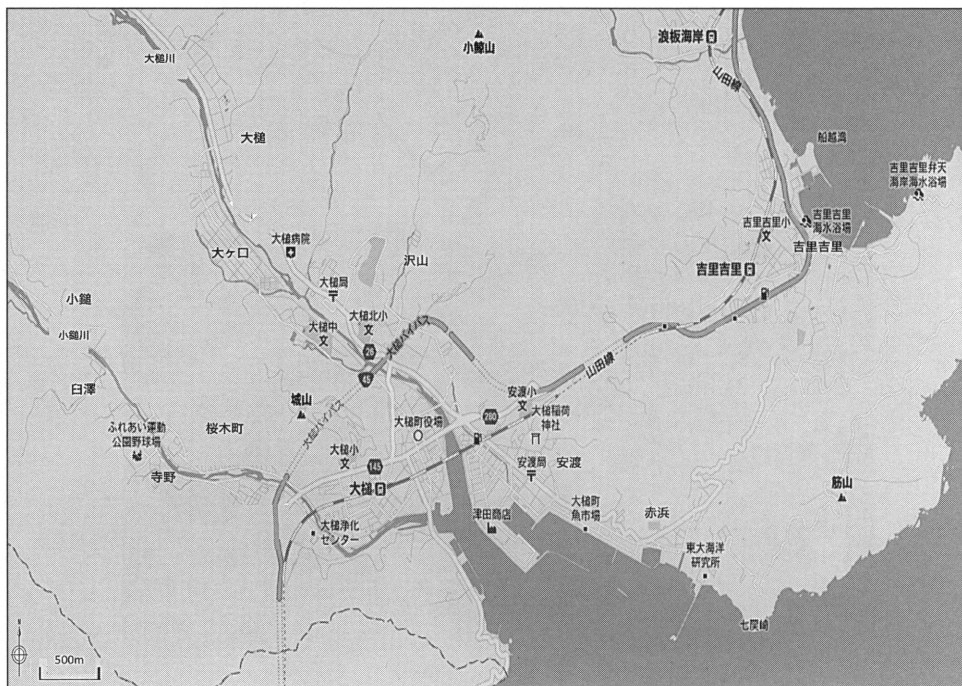
私たちが岩手県に入ったのが二〇一一年の四月八日。四月とはいえ、雪のちらつく寒い日であった。そのときから、被災後一年半を経過した二〇一二年の九月一日までの約半分、合わせて八ヶ月を、私たちは岩手県上閉伊郡大槌町を中心に、となりの釜石市や山田町で過ごすことになったのだった。

とはいっても、最初から大槌町に行こうと決めていたわけではなかった。どこに行こうかと考えたとき、宮城県下の市町村では被災直後から多くのボランティアが入って、支援活動をおこなっていることがわかっていて、それで岩手県に入ろうと思ったのだが、インターネットで調べると、岩手県下の市町村のほとんどはボランティアを受け入れていなかった。そのなかでは、岩手県上閉伊郡大槌町だけは外部のボランティアに対して開かれた唯一

の市町村であった。津波によって町長が亡くなり、役場が破壊され、警察署も消防署も医療機関も商店街も無くなるなど、すべての機能を喪失した大槌町は、おそらくそれを断る余裕もなかったのだ。

高速道路の北陸道から東北自動車道にまわり、花巻で高速をおりて、遠野、釜石へと車を走らせる。そこまでは、道路の陥没や崩壊を知らせる警告板が出ているほかは、変わらない日常がつついてるように見えた。しかし、その先はとてことばになるものではなかった。テレビや新聞のニュースで知っていたつもりだったが、JRの釜石駅から先で目にしたのは、予想をはるかに上回る惨状であった。信号はすべて失われ、道路の両側には家々のがれきりや破壊された車がうず高く積み上げられ、鉄筋建造物をのぞいてすべてがなくなっている。しかも、わずかに残った鉄筋の建物さえ、壁は大きく破れ黒く焦げて、火災の刻印が深く残されていたのだった。

道はいたるところで陥没したり舗装が剥げており、標識も信号もない土地を走らせるうちに心細さは増すばかりだった。何も勝手がわからないままに、インターネッ



「大津 4月10日」 大津町は津波とその後に生じた火災によって完全に破壊された



〔安波4月13日〕 被災後1ヶ月の大槌町安波地区

トで調べておいた大槌町のボランティアセンターに着く。ボランティアセンターというのは社会福祉協議会（社協）の管轄とされるのだが、社協の事務局長や課長をはじめとするすべての役職者が津波で流され、施設が破壊された大槌町のセンターは、六畳ほどのテントのなかに電話機一台とホワイトボードが一枚あるだけだった。

電話機を手に話し込んでいた職員の手が空いたのを見計らって、ボランティアの登録をした上で、「がれきの撤去でも何でもやります」と口にする。しかし、中年の男ひとりと女ふたりの私たちでは、がれきの撤去をするには力不足と思われたのだろう。東京からきたNPO団体が津波で流された写真や書類の整理をしているので、それを手伝うよう依頼されたのだった。

泥にまみれた写真が語るもの

がれきの撤去といっても、崩れて折り重なっている家々の破片を、重機でまとめて処理すればよいというようなものではない。今回の震災で亡くなった人の九割九分は津波による被害者であり、津波は家のなかにいた人

びとを巻き込んで家ごと流したので、がれきの下には行方不明者がいる可能性があった。大槌町の北部の吉里吉里集落で、被災直後に住民の手で行方不明者の搜索とがれきの処理にあたったMさんは、そのときの模様をつぎのように語っている。

「道路確保っていうのは、瓦礫撤去して道路通れるようにするだけじゃなくて、瓦礫をどけながら、行方不明者の搜索も兼ねているんですね。重機運転する人で、重機のまわりに一〇人ぐらいいて、重機で瓦礫を静かに持ち上げて、その下のぞいて、犠牲者がいないか（確認して）。そういうのを搜索しながら、作業は進められました」。

そういう微妙で危険を伴う作業であるため、がれきの撤去は自衛隊の任務とされていた。彼らは大槌町の各地でがれきの撤去にあたっていたが、がれきの下からは遺体があらわれてくることもあれば、書類や写真があらわれてくることもあった。そうした書類の整理は、重要書類が含まれている可能性があるのです、本来は役場の仕事であったはずだ。しかし、津波によって役場の施設が完

全に崩壊し、全職員の四分の一を失っていた大槌町役場には、それに人員を割くだけの余力はなかった。そのため、がれきのなかから救い出された書類やアルバムは、役場にもって行くことができず、NPOやボランティアのところまわってきたのだった。

泥まみれの迷彩服に身を包んだ隊員が、毎日二〇箱、三〇箱と、書類やアルバムを漁業用のトロ箱に入れて運んでくる。それを分類整理し、表面にこびりついた泥をとりのぞいて、役場や住民にお返しするのが私たちの仕事であった。若い自衛隊員にとって、建物の解体や廃材の運搬はお手のものであっただろう。しかし、人間の記憶の籠ったアルバムや書類は、どうしてよいか対処の仕方がわからなかったに違いなかった。それらの詰まった泥まみれの箱を私たちのいる場所に運び込むと、彼らは一様に安堵の表情を浮かべるのだった。

毎日数十箱も運ばれてくる書類のなかには、卒業證書や身分証明書があったし、会社や商店の出納簿や納税通知書があったし、貯金通帳や土地と家屋の権利書さえ挟まれていた。アルバムやバラバラになった写真のうち、

もっとも多いのは結婚式の写真であり、生まれたての乳児の写真であり、入卒業式の写真であり、家族の集合写真であった。それに加えて、もう半世紀以上も前に撮られたはずの出征兵士の写真が何枚かあったことも印象に残っている。

人間の一生のうちに生じるさまざまな出来事と、社会のなかで生きていることの証であるそれらの品々。それを失った人びとは、どのようにして記憶を呼び起こし、紡いでいけばよいのか。私たちの作業場には毎日一〇〇冊を超えるアルバムが運び込まれていたが、六七〇〇戸の全家屋のうちの半数以上が全半壊していた大槌町民にとって、それはごく一部でしかなかったはずだ。

アルバムや書類は泥をとりのぞき、一枚一枚バラバラになった写真は水で洗ってきれいにする。重要な書類は日に一度まとめて役場にもっていたが、写真やアルバムは作業場の横にテントを張り、そこに並べておいた。すると毎日何十人もの人がやってきて、アルバムや写真を眺めていくのだった。なかには、津波で亡くなった家族の写真を見つけることができたといって、さらに一枚で

も多くの写真を見つけたいと、泣きながら写真の山をかき分けている人もいた。

写真や書類の整理は肉體だけをもちいる単純作業なので、その作業をしながら、いろんなことが頭に浮かんでくる。私と家族はボランティアとして何日間という予定もなくやってきていたのだが、私は博物館に勤務する人間なのだから、そのような形で現地の人びとに協力できることがあるのではないか。破壊されたまちの再建は喫緊の課題となるはずだが、過去に他所でまちづくりの手伝いをした経験のある私には、その方面でも協力ができるのではないか。そのように考えた私は、一日の作業が終わるといくつかの避難所をまわって、避難者の話を聞いたり、まちづくりの活動を中心に担ってくれそうな人を探しはじめたりしたのだった。

とはいっても、すべての機能を喪失した大槌町にとって、まちづくりの必要性はわかっていたが、それをおこなう人材も余力もどこにも存在しなかった。であれば、いったん帰って出直した方がよいのではないか。滞在が二週間を経過するころには、私たちはそう考えていた。



「写真整理4月10日」 津波に流された書類や写真の整理はボランティアに委ねられていた

現地の人びとと出会う

つぎに大槌町に入った五月末には、私の活動目的は明確になっていった。大槌町をはじめとする近隣の市町村で、住民が主体となってまちづくりを実施しているところがあれば、それを支援すること。そして、その作業をおこなう過程で、あるいは避難所の運営を支援する過程で、知り合った人びとの被災の経験をビデオやレコーダーに記録することで、将来地域にできるであろう津波博物館や資料館のための準備にあたること。それにあたっては、津波からどう避難したかと、避難所をどう運営したかの二点を中心に聞いていくこと。そう考えたのだった。

先にも述べたように、津波によってすべての機能が崩壊した大槌町では、まちづくりのための体制は少しも進んでいなかった。町長のいない役場では、八月以降に町長が選出された時点で、将来構想を検討するという方針を出していた。そのことに対し、町の若手のあいだから危機感をもった人びとが数名あらわれ、「大槌復興まちづくり実行委員会」を立ち上げようという動きが生じてい

た。しかも、ちょうど私たちが大槌町に戻ってきた五月三日に、その第一回の会議が避難所になっていた安渡小学校の廊下で開催されたのだった。

会議は定刻の六時にはじめられたが、そのときは二人ぐらいが出席していただけだった。住民はまちづくりに関心がないのだろうか、こんな状態では先行きが思いやられるな、などと考えているうちに人が集まりはじめた。じきに、狭い廊下に百人を超える人々がびっしりと座るようになったのだった。会議は熱を帯びていき、すべてを喪失した大槌町にとって、まちづくりがいかに重要であり、人びとの関心の的であるかが明らかにになっていった。

大槌町ではじめておこなわれる住民主催の会議ということで、大勢のマスコミ関係者や研究者がやってきていた。私は主催者とは面識がなかったもので、会議の終了後に自己紹介をして手伝いをするのを申し出た。その後、住民会議は五回開かれたが、全部の会議に出席しただけでなく、会議の前には避難所や被災しなかった家々をまわって会議の案内を配って歩いたり、会議ではすべての

参加者の発言を記録してまとめ、主催者に渡したりした。そうする一方で、会議のなかで鋭い発言をした人や、被災の経験を記録することの重要性を主張した人を記憶しておき、会議が終わると話をしてくれるようにたのんではまわった。まちづくりを手伝いながら知己を増やしていく、被災後の生活や避難所の運営方法をたずねるといやり方は、大槌町だけでなく、となりの釜石市でもつけていった。

そして、会議のない日には、大槌町に三八ヶ所あった避難所をまわり、避難所の運営の仕方について責任者から話を聞くという作業をつづけていった。そのようにしてビデオに撮った人の数は四五人、時間でいえば約四〇時間に達している。また、そのほかにレコーダーに記録したり話を聞いたりした人の数は、合わせて一五〇人を超えている。以下には、そのようにして記録した人びとの話をいくつか取り上げよう。

さまざまな経験と記憶

Aさんの自宅は大槌町のJ Rの駅のすぐそばにあった。

津波警報で津波の高さが三メートルと発表されていたので、六・五メートルで整備されている大槌湾の防潮堤が防いでくれると信じて、いち早く脱出した家族とは別に家にとどまっていた。気が付いた時にはもう津波が家に流れ込んでおり、二階の窓から一階部分の屋根に脱出しただけで、身動きの取れないまま津波に流されて漂流したのだった。その途中でAさんは、おなじように屋根に乗って流されている別の人に遭遇した。Aさん自身は陸の方に流されて助かったが、海の方に流されていった人とはその後二度と会うことはなかった。

「四、五〇メートル先を見たら、若い四〇代ぐらいのジーンズをはいたスリムな人なんですけど、ヤツケを着てですね、腕章つけて、帽子を被ってデイバックを背負ってるんですね。で、あれっ、あの人も屋根のところで足でまたいで帽子をかぶって、自分と同じように流されているんだなあ、と思っていたらね、私の方を見てにこっと笑って手を振っているんですね。それが三時過ぎですの、西日に照らされているんですね。後光がさしているみたいで照らされて。で、その人はもしかすると仏様に

なったんだなって、今考えれば。で、数秒後に見たらもういなかったんですね。私は上の方に、駅から小槌神社の方に流されて、その人は町から海の方に流されたんですね。で、その人はだんだんだんだん海の方に行く。その流れていくやつを見て、この人も自分とおなじように漂流しているのかなと思ったら、にこっと笑って私に手を振っているんで。もしかしたら仏様、神さまに、そういうように私には見えたんですね。あの光景はもう忘れないですね」。

その後、Aさんは鉄筋の建物の二階に漂着したので、そのなかに入った。ここなら安全だと思っていると、津波の第二波が襲い、顔の高さまで水がきて危うく死ぬところだった。さいわい、それ以上水は増水しなかったので命拾いをした。その後も、すぐ近くでプロパンガスボンベが爆発して火災が生じるなどの危機を越えて、Aさんは奇跡的に一命を取り留めた。「こういうのは、偶然じゃあない、偶然じゃない。もしかしたら神様に生かされたっていうか、そういう思いがありますね。で、生かされた命だったら、さっきお話ししたとおり、やっぱり避

難所で被災している人たちと手を合わせて生きていかなくやならないという思いをすごく感じました」。

AさんはNPO団体と協力して、被災した人びとに現金収入の道を確保するべく「まごころ広場」などの施設を開設したのだが、その出発点は彼の極限的な経験と、難所で接した悲惨な体験をもった人びととの出会いにあった。「ここ（避難所）にきた釜石市の方なんです、四歳と二歳の女の子をもっている若い奥さんがですね、津波がきたらここに逃げてくださいっていう避難施設、一時避難の場所に避難したら、二歳の女の子が波にさらわれて。もう少しで自分の手の届くところにまでいったんですが、波にさらわれて、二歳の女の子を亡くしてしまっただけで半狂乱で、涙を流していたんで。そういう悲惨な人がたくさんいるんで、やっぱり生かされた者として、何か共に被災者として手を携えていけるような場所はないものかなと。被災者の救済のために何かできないかっていうところで意気投合して、こういう場所をオープンしたということです」。

Bさん。大槌町のとなりの釜石市のある集落の町内会

長であり、集落の復興まちづくりを中心的に担っている。被災前の家族は、九〇歳をすぎた両親と妻と息子の五人であった。Bさんの家は集落のなかでも高台にあったので、津波が発生したとしてもここまでは水がこないと高をくくっていた。ところが、沖に築かれていた防波堤を一瞬にして破壊した津波は、六・五メートルの高さの防波堤を越えて集落に流れ込んだ。あつという間のことだった。かろうじて妻と母親は逃げ出したが、寝たきりであった父親は津波に巻き込まれてさらわれていった。

津波のあとの町内会長の役ほど大変なものはない。遺体を確認するのは町内会長の仕事だし、復興のためのまちづくりがはじまると、土地の売買や移転候補地の所有者との交渉、市や町役場との交渉など、すべての仕事町内会長の肩に降りかかってくる。この集落の場合には、集落につながる道路が陥没して使えなかったので、地震から三ヶ月間、集落に戻ることができなかった。それで遺体の確認作業はおこなわずに済んだのだが、避難所で生じるさまざまな困難や課題はすべて町内会長のところに持ち込まれたのだった。

そうした雑務に忙殺する夫を支えていた明るい性格の妻であったが、集落の仮設住宅に戻ってしばらくした朝早く、海に入水して亡くなった。あとで聞いてまわると、義理の父親を見殺しにしたことをずっと悔やんでいたという。

彼女が寝ていた布団の枕元には、「子供の能力しかなかった私です。本当に長い間、お世話になりました。ごめんなさい」と書かれた遺書が残されていた。「なんで死んだのかなあ。やっと津波っから助かったんな。今でもわかんねえのよ、俺」。私はBさんとはまちづくりの過程で数ヶ月つきあったが、何度かそうつぶやいていたのを耳にしている。父親は寝たきりだったので、助けられなかったとしても仕方がない。一度もそのことを責めたことはなかった。それなのに、なぜ妻は入水したのか。妻をなくしたことの悲しみに加え、なぜ入水を選択したのか、それも津波をかううじて逃れて命拾いしたあとに、そうした問いは、答えのないままに、いつまでもBさんの心のなかに残りつづけているようだった。

Cさん。釜石市のある集落で、とても繁盛した民宿を

経営していた。お客さんに喜んでもらいたかったので、客は一日に一組と決めていた。魚は漁師である夫がとってくるもの、ウニやホタテは近くの海でとれるものを出していたので、たいそうお客に喜ばれていた。なかなか予約が取れないほど繁盛していた民宿であったという。

家族は夫と娘がふたり。長女は嫁いで他処に行っているので、めったに会うことはない。次女は結婚して、となりの大槌町の役場に勤めていた。夫と娘の三人家族であり、将来的には家業の民宿を継ぐか、少なくとも自分の仕事を継続しながら手伝う予定であった。しかし彼女は、二階まで津波が襲って全壊した役場で水に巻き込まれて、多くの同僚と共に亡くなったのだった。

Cさんは町内会長である夫を助けて、まちづくりの会議や、他所から来るボランティアの世話に没頭していたが、ときおり話は亡くなった娘のところへ戻っていった。「津波の前の日にね、親子三人で焼き肉を食べているのを見たって人がいてね。とても楽しそうだったよって。そう言ってもらえたのが、うれしかったよね」。とはいえ、娘が死んでしまったのだから、婿と孫をこれ以

上身近に引き留めておくわけにはいかない。それで婚とは離縁し、可愛がつっていた孫はその実家に引き取らせたのだった。「さみしいね。なんで私だけ生き残ったんだらうね。なんで私だけね」。うつむきながら、そうつぶやいていた彼女の声を今もおぼえている。

Dさん。独身で母親と二人暮らしであった。たいそうな揺れだったので、これは津波がくると確信した。しかし自分の家は高台にあつたので、ここまでは津波がくることはないと思ひ、さらに高台にのぼって、趣味である写真を撮っていた。津波によつて海底まであらわになつた大槌湾。津波がまちに襲いかかり、多くの家々をまるでマツチ箱のように流していくさま。そのとき目の下を見ると、津波が自分の家を襲い、なかにいた母親もろとも流していくのを目撃した。母親はいったんは高台に逃げたが、猫を逃そうとして自宅に戻つたところを津波の第一波に襲われたと、あとで隣人から聞いたのだった。

「五人亡くしても、一〇人亡くしても、ひとり亡くしても、気持ちはおなじですよ。おなじひとりに変わりはないからね。ひとりも、五人もすべておなじ。行方不明、

被害にあつた家族は、私もそうですけれどもね、みなおなじですよ」。

Fさん。吉里吉里集落で消防団長やPTA会長をつとめた経験から、集落内の人びとのほぼ全員の身体的特徴や病歴をよく知っていた。そのため、地区で遺体があるたびに検分に立ち会う役を引き受けていた。「遺体はね、損傷がひどくて、顔見ただけではわからないことが多かつたんですよ。あの人は乳がんの手術をしたことがあつたとか、あの人は胸を患つて手術をしたとか、そんなことを考えながら確認していきました。一ヶ月半たつて見つかつた人なんか、顔はもう崩れていてね。でも、小さな小刀を紐に結わえて身につけていたっていうから、ああそれは（行方がわからなくなっている）漁師の田中さんだつて。漁師は網をつくろつたりするのに、よく小刀を身につけてますからね」。吉里吉里で亡くなつた八八名のうち、行方不明者十数名をのぞく約七〇名は、こうしてDNA鑑定を待つことなく彼の手で確認されたのだった。

Fさんだけではわからないことも多かつたので、Fさ

んは同期のGさんなどにも声をかけて一緒に検分をしたことがあった。そのことをGさんにたずねると、彼は少しも屈託のない顔でこう答えた。「まあ、ひどかったね耳だって、鼻だって、もげて、ねえんだもん。顔見たってわかんねえのよ、誰っか」。それらの人びとのことを思い出すことはないのか、夢で見ることはないのかと聞くと、「ねえ、ねえ。見たことなんかねえ」。酒飲み仲間と笑いながら、そう答えていたのが印象に残っている。

岩手県沿岸部で被災後活動した警察官三三〇名のうち、約一五パーセントにPTSDの徴候が出ているという新聞報道がある（『岩手日報』二〇一二年八月一四日）。凶悪犯罪や惨たらしい自動車事故の現場に慣れているはずの警察官でさえこうなのだから、顔の崩れた遺体の検分は、慣れない彼らにはどれほど過酷な経験であったことか。そう思ってたずねたのだが、FさんやGさんを見ているかぎり、PTSDなどの心配はまったくなかった。地域の人びとのために活動しているという気持ちと、地域の人びとから返される感謝との相互関係が、つまり個人人の感情や経験が集合体のなかに吸収されていく構造が存

在することが、彼らの精神的安定に大きく貢献していたに違いなかった。

Hさん。津波によって母と妻と息子が流されてしまい、彼だけがひとり残されている。あの日、外出先で強い揺れを経験したHさんが自宅に戻ると、妻が消防団の半纏とヘルメットを用意して戸口で待っていた。すぐに出動できるようにとの心遣いだった。奥の部屋では寝たきりになった母がいるので、妻と息子はその面倒を見ていた。Hさんは「では行ってくる」とだけ言って、家を後にした。なぜあるとき、「すぐに避難するように」と言わなかったのか。消防団の団長として、大きな地震があれば津波がかならずやってくるに違いないことを、人にも言い、自分にも言い聞かせてきたはずだった。それなのに、なぜあるときにそれを家族に対して言わなかったのか。

Hさんはそのあと、消防団の団長として海を見守る職務についた。彼らが河口付近の水門のすぐそばで海を眺めていると、沖の方で水が盛り上がっているのが見えた。あわてて車に乗って高台に逃げたのだが、後続車は津波

に巻き込まれてしまったほど間一髪のところだった。そのあと彼らは高台から、津波がまちを呑み込んでいく一部始終を眺めていた。自分の家が破壊されていくところも、Hさんは見ていたのだった。

喪の経験への向き合い方

岩手県下のいくつかの市町村で、震災とその後の数ヶ月をどのように経験したかを聞いているうちに、明らかになってきたことが二つある。ひとつは、彼らの篤実な

語りのなかに存在する喪の経験の大きさである。とりわけ、近親者を亡くした人びとの心の底に積み重なっているような出口のない悲しみは、家も財産もすべてを失ったが、身内に死者を出さなかった人びとの底の抜けたような明るさと対照的であった。もうひとつは、彼らがこれまでそのなかで生きてきたし、津波で亡くなった死者たちの思い出の込もっている、地域というものに対する思い入れの強さである。

喪の経験に対して人びとがどう向き合うかは、宗教学や人類学の分野で多くの研究が積み重ねられている。そ

うした向き合い方のひとつに災因論と呼ばれるものがある。出来事の背後にある種の因果関係を想定し、それを物語に組み立てることで、生々しい出来事の衝撃の強さを軽減し、それを理解可能にしようという方法である。

たとえばデンマーク出身の小説家イサク・ディネセンは、そのことを次のように言っている。「あらゆる悲しみは、それを物語に変えるかそれについての物語を語ることで、耐えられるものとなる」(『アフリカの日々』晶文社)。

しかし、私が聞いたかぎりでは、いまだに被災した人びとのなかから物語が生まれているようには見えていない。被災後の経験についてたずねると、多くの人びとは堰を切ったように話してくれた。なかには、一時間以上も話してくれた人もいたが、そこにあるのは経験の生々しさと衝撃の大きさであり、物語といえるようなものにはまだなっていないかった。

一方、物語を作ろうとしているのは、震災を直接には経験していない外部の人間である。「この津波をうまく利用して、我欲を一回洗い落とす必要がある。積年たま

った日本人の心のアカをね。これはやっぱり天罰だと思
う」。こう語ったのは、石原慎太郎東京都知事（当時）で
あった。被災者の悲しみに想像がおよんでいない点で文
学者としては失格だが、それ以上に、惨劇を利用して自
分の主張を押し通そうとする不遜と功利主義が、発言者
の品格のなさを示している。

別の種類の発言に中沢新一氏のそれがある。この発言
はそれなりに誠実な意図でなされたものだろうが、出来
事の衝撃を引き受けるより、そこに過剰な意味を押しつ
けている点で、被災者たちの心情から遠く離れたものにな
っている。「日本はいま、文明として衰退の道に踏み
込んでしまいかねない、危機の状況にある。その日本文
明が大津波と原発事故がもたらした大災禍をきっかけと
して、新たな生まれ変わりの道を開いていくために、私
たちのとるべき選択肢は、ただひとつであるように思わ
れる。：私たちは世界に先駆けて自覚的に第八次エネル
ギー革命の道に踏み込んでいく、またとない機会を得た。
そしてそれとおして、袋小路に入り込んでいる現代の
資本主義に、大きな転換をもたらすのである。そのよう

に今日の事態を理解するときにはじめて、私たちには希
望が生まれる」（中沢新一『日本の大転換』集英新書）。

壮大な文明論ではあるが、これらのことばがいくら積
み重ねられたとしても、近親者を失った被災者には悲し
さが生じるだけだろう。彼らはいまだに、「なぜ、自分が
生き残ったのか」「なぜ、自分だけが生き残ったのか」と
問いつづけている。娘を亡くしたCさんや、被災の後数
ヶ月して妻を入水自殺で失ったBさんがそうであるよう
に。

そうした被災者の心情に関して、「サバイバース・ギル
ト」という便利なことばがある。過酷な経験を生き延び
た人びとにしばしばあらわれる有罪性の感覚であり、た
とえばホロコーストや福知山線脱線事故の生存者などに
それが見られたという。しかし、そんな観念がいくらふ
りかざされたとしても、彼らの悲しみが癒されることは
ないはずだ。

そうした距離のある発言に比較すると、死者を記念
し祈念しようとするいくつかの試みは、その慎ましさ
の点で私には好ましいものに思われる。震災一年後の

二〇一二年三月一日に、岩手県の県紙である『岩手日報』は、岩手県下で亡くなった約五八〇〇〇人のうちの二〇〇〇人の写真と思いい出を掲載する試みを開始した。その試みは今日もなお断続的におこなわれており、将来的にはすべての死者や行方不明者を新聞紙上に記載することをめざしているようである。

一方、同じく被災の事実を後世に伝えようとする試みのうち、津波が破壊した施設をそのまま保存しようという試みは、各地で強い反対にあっている。大槌町赤浜の民宿の上に乗り上げた釜石市の観光船「はまゆり号」は、多くの研究者が保存運動を起こしたにもかかわらず、被災後すぐに釜石市長の意向で解体撤去された。亡くなるまで町民に避難を呼びかけていた遠藤未希さんを含めた二〇数名の職員が亡くなった、鉄筋だけが残っている三階建ての南三陸町の防災対策庁舎も、解体撤去が決定されている（『河北新報』二〇一二年五月一八日）。

おなじように、一四〇名の職員のうち四〇名もの生命が奪われた大槌町の役場は、少なくともその一部を残したいとする町長の見解に対し、住民の半数以上、役場

職員の八割もが反対意見を表明している（『岩手日報』二〇一二年一月一〇日）。遺族のなかでは、建物が悲痛な感情を引き起こすので解体撤去してほしいという意見がマジヨリティだが、なかには自分の娘が亡くなったことの証しとして、そのまま保存してほしいとする遺族の声もある。

遺族や被災者の語りがそのままの形で保存されず、悲劇を直接に伝える施設が解体されたとき、試みられるのは経験の捏造であり、記憶の捏造であろう。神戸市に「人と防災未来センター」という、阪神淡路大震災を記念する施設がある。震災の記憶を語り伝えると同時に、防災のための意識の啓発や研究をおこなうための施設である。そこを訪れると、入館者はまず暗い部屋に入れられ、地震の揺れを経験させられた後に、被災者を模した語りを聞かされる。しかしその語りは、一見ありそうではあるが、誰のものでもない語りではない。

私はこうした語りの創造ないし捏造は、死者と生存者に対する冒瀆であると思っている。その語りは、おそらく広告代理店がつくったものだろう。その語りからはす



〔赤浜4月23日〕 大植町赤浜の民宿の上に乗上げた「はまゆり号」

べての固有名詞が落とされ、経験の固有性が平均化され希薄化されることで、差しさわりのない語りへと変換されてしまっている。今回の地震と津波も、被害の生々しさを伝える施設がそのままのかたちで保存されることがなかったなら、記憶が創造され、経験が捏造されるであろうことは目に見えている。冒瀆としかいいようのないそうした事態が生じることのないよう、被災者の経験や記憶を正確に記録する努力をつづける一方で、これらの施設が一部でも残されるよう運動していきたいと私は考えているのだ。

地域と宗教

最後に一つの問いがある。近親者をなくした人びとが抱えつづけている悲しみを、「宗教」は包み込むことができたのか、という問いである。今回の被災の直後から多くの宗教団体が被災地で活動を開始したのは事実である。避難物資の搬送や避難所の運営支援のボランティア活動に従事したり、僧侶が亡くなったか僧侶のいない地区では物故者を慰めるためにお経を詠んだりするなど、

各地で積極的な活動が展開されたのだった。

そうした活動があったことを否定するわけではないが、私の印象により強く残っているのは、地域に結びついた祭りのもつ力である。そのことを、先のAさんはつぎのように語っている。

「四月二十七日に、それから五月の一日に鹿子踊を伝承館でやったんですが、あの時に異様な雰囲気になったんですね。それはなにかっていうと、踊っている人も奥さんを亡くしたり、いとこや親戚を亡くしたり、財産を亡くしたり、それを見ている人も同じような人たちです。見ている人も舞っている人もおなじ境遇なんです。それがあそこの空間の場です。踊っている人は、もつと

さらに五月一日の伝承館で鹿子踊をした日は、もつとすごい状況になったですね。踊っている人と見ている人が一体化して、あの空間がもうなんというんですかね、異様な雰囲気。その時、取材しているカメラマンも涙を流しながら取材している、カメラを回しているんですね。何でこういうことになるのかなと私なりに考えたんですが、やっぱり伝統芸能っていうのはコミュニティを

構成するもつとも重要な要素を持つんじゃないか。

今まで伝統芸能っていうのは、大槌のお祭りに二四、五団体出るんですけど、その団体がすべて親から子、子から孫へ、代々口伝で伝えられてきたものなんですね。そのお祭りが、津波のためにズタズタにされてしまった。何百人以上も流されて、九月のお祭り（地域の神社の大祭）に出てくる山車の三分の二以上が流されてしまっ、お祭りをする状況じゃないと。道具も流され衣装も流され、なおかつ代表の方や中堅どころが方々に散らばってしまっ、継承する人がいなくなっ、コミユニティがバラバラになっ、しまうのではないかという気がして、ここでスタートしたんですね。

声をかけた時に、お祭りどころじゃないと。衣装も流され、何もかも流されたので、そんなことやっている暇がないって、言われたんですけど。でも、今だからこそ、それをやらないと、あんたたちもチャンスがないですよ。踊ることによって、見ている人にも勇気を与えるので、やって下さいって説得して、五月の一二日に



「大槌4月20日」 破壊された町を歩く老夫婦

もやりました。そしてここに三百四、五〇人の方が集まってですね。踊っている人も涙を流し、見ている人もそれに声を出してですね、大変な勇気をいただいたって、ということもあって。それ以来、うちも出たい、うちも出たいという声が出てきました。そのうちに、じゃあ九月のお祭りは絶対やろうぜっていう声になってきました。これもひとつになっていかなければ駄目だっていうエネルギーが、この場所から生まれつつあるという思いを持っていますね」

被災地に長期間通い、多くの人びとから被災後の行動と生活のあり方についてたずねてきた私が、今抱いている印象はつぎのことだ。東日本大震災後、日本各地で多くの人びとが「つながり」について語り、その重要性を再認識した。そのことばが今どこをさまよっているのかはわからないが、被災地で多く語られているのはむしろ「地域」であり、それについてますます多くの人が語るようになっていくという事実である。

おなじ空間で生きてきて、大災害を共に経験し、死者の記憶とその無念さが残っている空間としての地域の

もつ磁力の強さ。多くの人びとはそれを再認識すること
で、これまで決して語ることのなかったまちづくりにつ
いて語りはじめているし、県や市町村が提示した防潮堤
の高さや規模についても疑問を提出しはじめている。ま
た多くの地域では、すべてを無くした人びとが協力して
NPO法人や社団法人を立ち上げて、相互扶助にもとづ
く新たな経済活動を開始するようになっていたのである。

このように、ひとつひとつの悲しみを回収するだけで
なく、人びとを未来に向かう行為へと駆り立てる力をも
つ地域（あるいは地域コミュニティ）に対し、被災後に
「宗教」が占めた場はきわめて限られていたように私に
は思われるのだ。もちろん、どの地域でも死者を悼むた
めの儀礼が欠かされることはなかったし、それを遂行す
るためにこそ、家も財産もすべてをなくした人びとは大
変な努力を払ってきたのだった。しかし、そうした儀礼
としての側面を別としたなら、「宗教」は被災者の心に

どれだけの垂涎をおろすことができたのか。それは、被災者の悲しみを包摂するために、いかなることばを新しくつくりだすことができたのか。それを考えると、私は「宗教」が今回の被災後に大きな役割を演じえたと言
うことはできないのだ。

ひよっとしたら「宗教」とは、地域に回収されない人
びとを受け入れるための受け皿なのかもしれない。そし
て、未曾有の災害に対して未曾有のことばを作り出すこ
とのできなかった既存の「宗教」は、今回の被災を契機
に大きく変わっていくのかもしれない。

（この文章は、二〇一三年一月に出版された拙書『被災後を
生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』と一部重複して
いる。同書のなかでは固有名詞を出しているが、本稿は悲
痛な語りを取り上げているので、匿名にしている。）